

ペットボトル見て！不思議！

子どもたちの遊びを「〇〇遊びをしている」と見取るだけでなく、きっかけを見取って「～を感じている」「～をしようとしている」と心の動きを理解することは、子どもの体験の質を読み取る保育に繋がります。この事例は、遊びのきっかけとして子どもたちが繰り返している言動に注目しています。

子ども（4歳児）

甲良町立甲良東保育センターあおぞら園

園庭で様々な水遊びを楽しんでいる子どもたち。道具や素材を子どもたちの「面白そう」「試したい」というそれぞれの思いで使って楽しんでいる。そんな中、何人かの子どもたちが使っていたペットボトルをプールに持ち込んだ。ペットボトルの中にプールの水を入れたり、友達や保育者にその水をかけたりして遊んでいる。（6月）

姿1 水がこぼれない！？

Aさんは、水を入れた**ペットボトルをプールの縁に逆さに置く動きを何度も楽しむ。**

「ほら、見てみ！蓋してないのにこぼれへんで！」と、嬉しそうに言い、やって見せる。

子どもたち「ほんまや！」



姿2 水が白くなる！？

ペットボトルに手でふたをしてシャカシャカと何度も振っている子どもたちがいる。Bさんは色の変化を発見して「水が白くなったで」と言う。Cさんは炭酸水のような泡ができることを発見し、「泡水や！」「シュワシュワ」「あわあわ！」と言い、何度も確かめる。Dさんはペットボトルの中の水の動きを発見して「ぐるぐる回っているで」と言う。



姿3 消えた！？

水の中で目が開けられるFさんは、ペットボトルを持って水の中にもぐり、その後「ペットボトルが消えたよー！」と言う。**水の中ではペットボトルが消えることが不思議で何度も何度も確かめる。**



姿4 ペットボトルの中のまあるいものは何！？

こうして、様々な遊びを楽しんだ子どもたちは皆、ペットボトルに水を満タンに入れて振っても泡立たないことを試して知る。

ところが、この日、ペットボトルを横にすると「なんか、まあるいものがある」と知らせに来る。その丸いものは水の中を動き、立ててみると見えなくなる。また横にすると1つの丸いものが小さく2つ、3つにと、動かすごとに変わる。

子どもたちは「これって、何だろう？」と、ペットボトルの中で出てきたり隠れたりする“丸いもの”に夢中になり、立ててみたり、横にしたりして中を見る動きを繰り返している。

姿5 頑丈に貼ったのに！？

子どもたちは牛乳パックや空き箱などを繋げて大きな船を作り、プールで遊ぼうと考える。

最初はセロハンテープで付けていたが、はずれてしまう。紙ガムテープで丈夫にしようと重ねて貼ると、やはりはがれてしまうと気付き、糸（布）ガムテープがいいと、使い続ける。

完成し喜んで浮かべたが、船はプールの中でバラバラになり壊れる。子どもたちのその後のプール遊びは、大変な掃除になる。保育者は、「子どもたちは次も同様に船を作り、プールで遊んで壊れてもいいように『今度はみんながプール遊びを楽しんだ最後に浮かばせる』と言うだろう」と思った。しかし、保育者の予想とは反し、子どもたちは今まで遊んだ経験から、**水に濡れても大丈夫で壊れない素材やビニールテープを選んで、貼り方を工夫して再挑戦する。**

【考察】 プール遊びにペットボトルがあることで、子どもたちが様々なことに**気付いたり、不思議さや疑問を感じたりしている。**各場面にある**繰り返す姿**に注目することで、探求の深まりが把握できる。遊びながら「水の中で物がどうなるのか観察してきた」体験により、その後は壊れない船遊びに繋がった。子どもたちには、物と関わり遊びを展開してきた体験により、「科学する心」が育まれている。

「科学する心を育てる」保育に取り組むきっかけは、園により様々です。日常の保育場面で、「以前は見逃してしまいそうな子どもの体験を見取るようになった」ことが、継続して「科学する心」を主題にするきっかけになった園があります。園の保育の課題や目的に合致する「感性、主体性、創造性」に注目したことが、取り組みのきっかけになっている実践もあります。

以下の事例は、子どもと保育者が「共に暮らしをつくる生活者」として園生活を展開する「子ども主体の保育」を「科学する心」と結び付けて取り組みを始めた実践です。

保育者（共に暮らしをつくる生活者へ） 甲良町立甲良東保育センターあおぞら園

乳幼児が周りの物事に心を動かされて自ら関わっていくには、安心して活動できる生活が土台になる。そこで保育の見直しとして、「①**安心**して落ち着いて暮らせる生活空間（環境）になっているか ②今日一日（の出来事や流れ）が**見通せる生活**であるか ③**関わりたくなる環境や出来事**が身近にあり、自分自身で、また仲間と共に考えたり工夫したり、思うように関わっていける毎日が繰り返されているか」という3つの視点をもち、環境の工夫を図ってきた。

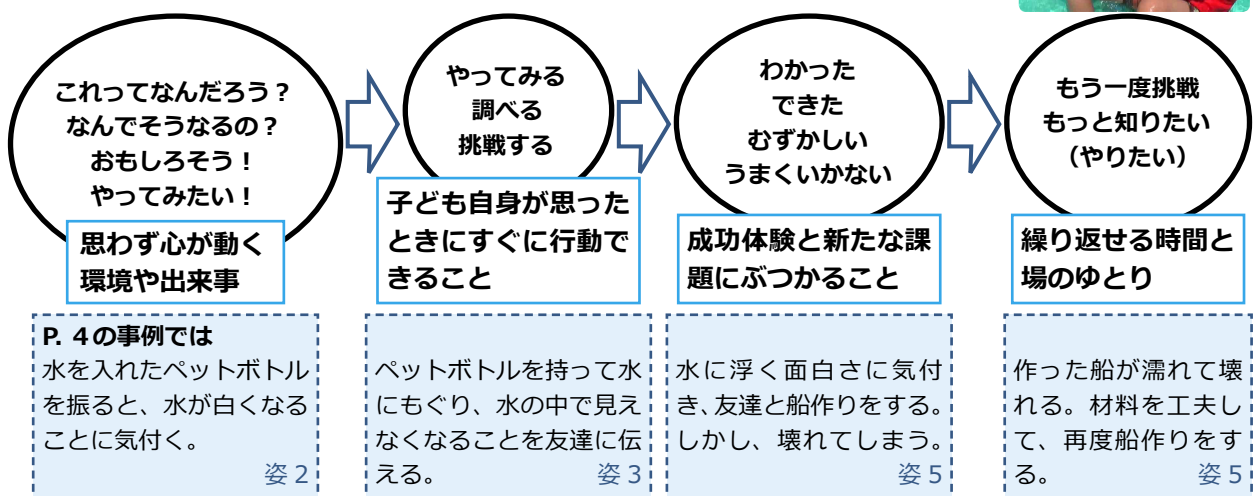
保育の課題・仮説 子どもが主体となって生活する園の風土づくりには、保育者の在り方が大きく作用するのではないか？

子どもたちは心を動かし、「やりたいこと」を自分たちで考える。そして、失敗も重ねながら何度も挑戦し、友達と一緒に乗り越えて活動する。その過程こそ子どもが育つ瞬間と捉え、保育者はできる限り子どもの思いが実現できるように時間と空間を保障し、同じ生活者としての関係を大切にする。



「科学する心を育てる」ことにより、

- ◆子どもたち一人一人が心を動かし思わず動き出してくる
- ◆子どもが、心が動いたことにすぐ行動できる
- ◆行動してぶつかった新たな疑問や目標に向かって繰り返し取り組める



【考察】 「子どもたち自身が気付いて動き出す」ことを、共に暮らしをつくる生活者として支える保育者の在り方が、子どもたちの豊かな学び（科学する心）に大きな意味をもつ。